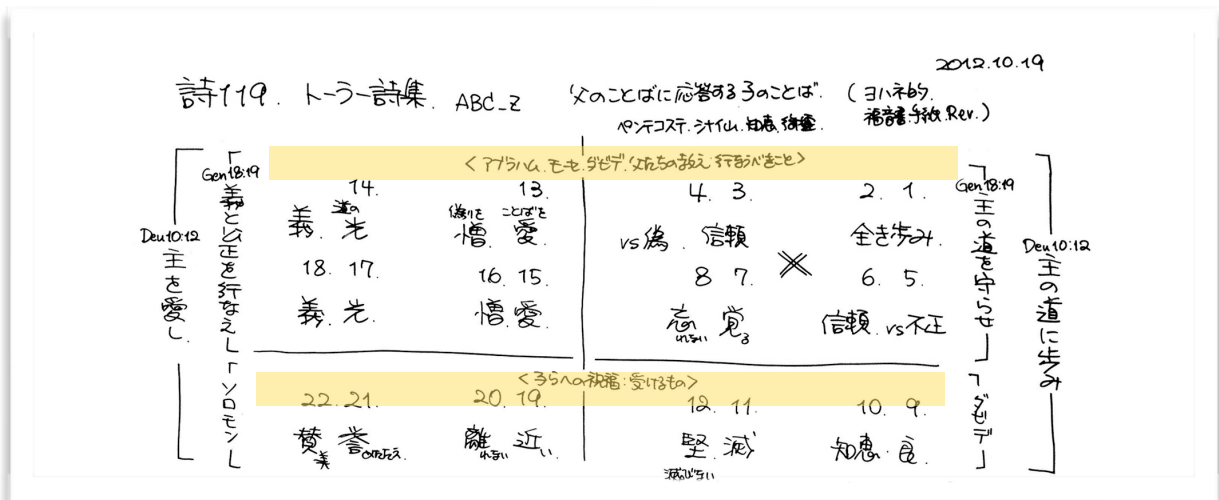
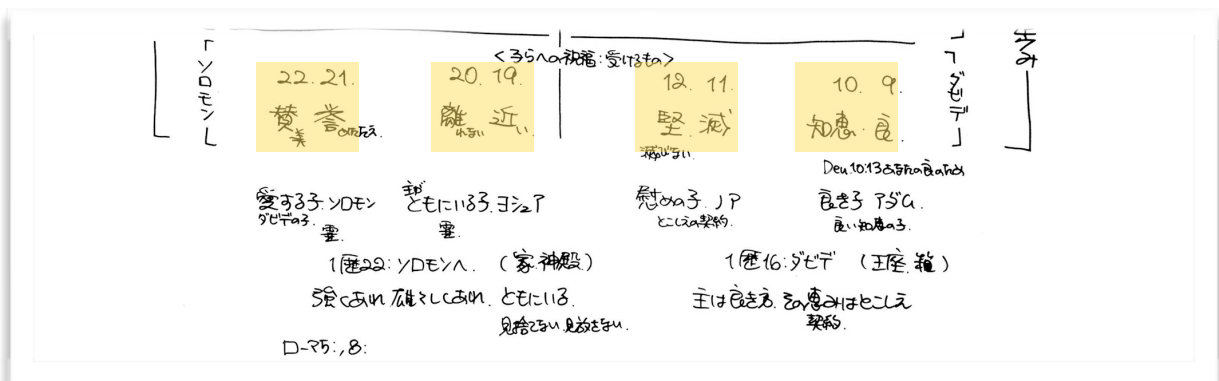




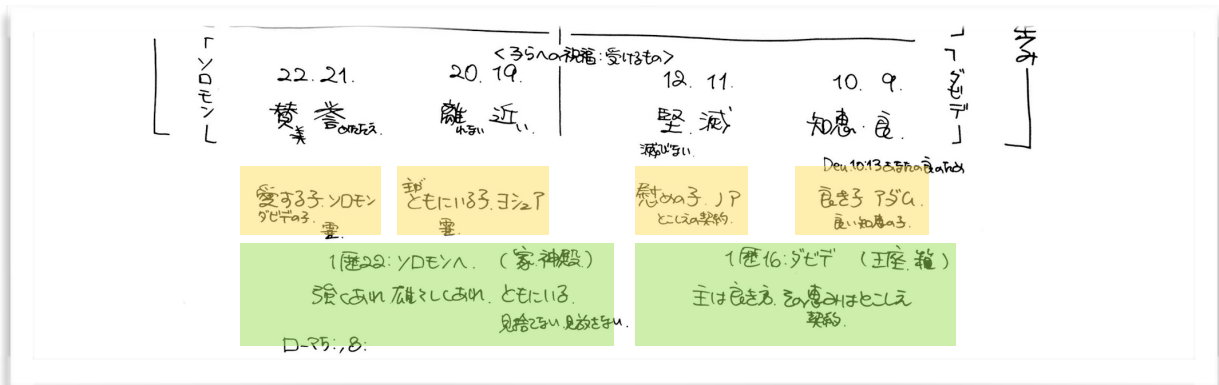
ラハムに言われている私たちが行うべきことです。その主の道を守らせるというのが1〜8まで、13〜18までが義と公正を行うというところだと思われま。愛があるのですが、愛と憎むこと。愛することの反対は憎むこと、何かを愛すれば何かを憎むことになる、何かを憎むなら何かを愛することになりますので、愛と憎むという戦いがこの裁き、光と義の裁きのところで書かれています。



1〜8、13〜18はアブラハム、モーセ、ダビデら父たちの教え、行うべきことについて特に強調されています。9、10、11、12、19、20、21、22、この段落の後半の部分は、そうするならばどういものが受けられるのか。子供たちへの祝福、父たちの教えと子らへの祝福ということで、9、10、11、12、19からというところがまとめられるのだと思います。



9、10はトブ、神様は良いかたである。その良いかたなので私たちは良いものを受け。10段落目は知恵、知ることの段落です。11は滅びる、しかし12で強く立てられる、滅びることはありません、とこしえですというレオラム (ヘブライ語のとこしえ) の段落。19と20は近い、離れないことが強調されています。21と22は神様を愛します。その愛する結果としてほめ称える、賛美します、歌を歌いますというのが21と22に書かれているところです。



この2つずつの組み合わせを（全体としては2つずつセットになっています）どう区別するのかを考えると、9、10は父なる神の子、良い知恵を与えられるはずであった正しいアダム、良い知恵を持っている子ども。11と12は、滅びないで堅くとしえの契約を与えられた（慰めるということばもあります）慰められる子どもノア。19と20は、主が共にいる、近くて離れません、あなたと共にいますというヨシュア。21と22は、ダビデの子、神様の愛する子、ダビデの子であるソロモン。というように、アダム、ノア、ヨシュア、ソロモンのことを連想しても良いのではと考えました。

9～12のほうは、第一歴代史16章のダビデの契約、契約の箱が戻ってきて、主は良い、その恵みはとこしえまでと歌っている箇所。19～22は、そのダビデが死ぬ前にソロモンに相続する。強くあれ雄々しくあれ、主は共にいて見捨てない、見放さないというソロモンへの言葉。この父ダビデの受けたものと、その父ダビデの道を歩むならば主と共に住んでくださるという契約の箱と契約の箱の住まいである神殿。王座と家という2つで9～12と19～22に分けられるのではないかと考えました。

父たちの教え、行うべきこと、守るなら子らへの祝福。その御霊の祝福である知恵と霊。ヨシュアもソロモンも受けたみことばの祝福。みことばの祝福というのは、知恵と共にいてくださる愛であるということがヨハネ福音書でも言われているとおり、119篇は、主を愛し主の道に歩みなさい、その愛は決して絶えることはありませんということをお教えられる詩集であろうと分析しています。